



日本策時記卷之五

秋

秋
 澤嘉律勝志よとく秋のなかり抱枕欽あくるに成勢
 すまゐるう圃雅又煉を白癩と云○如後又秋をあまの
 一いあきうくありとまをなりなひ湯さうんにて炎蒸乃
 氣うゝまゝうあま氣にとり煉を湯まてりて天色澄の
 かりやんや一まの中秋月
 尤あきうかり時多くとや

素問より秋三月これと容平といふ天氣の意は
 地氣の明なり早く臥して早く起る事難と
 但世よ志強いて安寧にして秋刑を緩し秋
 氣を收斂せしめ休養とて平にして其志と
 外よとありなり——め肺氣と志と通じし
 秋氣は金なり西にて素秋の造なりこれ月

逆ふ時を勝氣とせぬり冬後泄とせぬ

春の論よりく夏乃末秋の初勢よりく夏

三時衣をぬき裸よりて凍と貪るよりく五

脱乃胎穴皆背より余ひより人よりて腐志より

風と取又取より足と露せし風背より入中風の

候より衣切ぬこれとばより一先より一疾よりと

是よりハ八味地黄丸と服より一三白と忌

月令廣義よりく條二月收斂よりて後揚雄

事よりく

授生痛よりく秋氣を燥より宜く胡麻と食

てより火燭と固より

書に論よりく室衣より海草甚よりやより目の

疾或瘡瘍とより新穀初より熟よりたより老人

これよりく一室疾とより新米より

食ハ風重とより又早稻ハ半熟より

時よりてやより米より香美なりとより

夏より瘡瘍とより能脾胃とより

病より

月令廣義よりく秋より老人精足より

事より

物^{もの}大^{だい}びりびりさうれおろろと^た乃^のやまひとぬん
小見^{こみ}をらく火^かよ更^{さら}るす

攝生篇よりいへく煉乃刀をとり水とのをまかりたり
衣服と忌事とを忌む

金匱要畧よりて秋九十日食穀の肺と食へり次
 ま東垣よりて古人の云秋薑と食ふがれんとて
 去氣と云々一は晦者陰氣なり又秋薑は人の
 天年と云はるる強けり孫子邈よりて九月
 初より薑と食へるをよより眼と患事と換
 筋力と減す

七月

月 立秋ハ七月の暮を暑ハ七月の中○七月の美名ハ月三孟秋
 律と夷則と○七月の和名を文月と○七日
 をれとくまむとてあまことむく
 此よきつとくを略せり

六日沐浴

七日
七夕ちつせきと云又星夕せいゆふとも
いふなり
荊楚しやうそ宋そう河か紀きより

七月七日織女牽牛あつちよん渡會かひ乃あつちよんあまのり

五穀^{ごこく}紀^き元^{げん}元^{げん}織^お女^{にょ}牽^{けん}牛^{ぎう}の事^{こと}續^{ぞく}母^ぼ修^{しゆ}紀^き如^に之^の事^{こと}
 岳^{がく}言^{げん}とわけ抄^{しやう}物^{ぶつ}志^しの乗^{のり}援^{えん}乃^の浪^{なみ}収^{しゆ}と祀^{まつ}せり紀^き
 妻^{めかけ}婦^ふ人^{にん}孝^{かう}子^しの傳^{でん}く口^{くち}實^{じつ}とと所^{ところ}を可^かなり人^{ひと}
 墨^{すみ}士^し智^ちと常^{じやう}張^{ちやう}う天^{てん}上^{じやう}乃^の列^{りつ}名^なとて汚^け跡^{あと}と
 秘^ひし妙^{めう}を亦^{また}やしむるを一^{ひと}牙^がたりと志^し

せり海小確海と云つ處に此等ゆやまを
よ久しとありふり何人をも習て悉く
ありやまへ命符奇の料う一俣りげよは
何りとせりつるねりりれ甚しきなり又
は事なりとてとたふぬきこれとて
いふ天とせられざるなり新株れ葉を風
をね多し強奇の料を何りんわん人
此等とてふも何りぬう又信よふぬ
二星わい次といふ葉は雜記よ七月七日の夜
酒飯とてふるなりとわやより信えぬや

七夕のうゝ美葉集より

何れ川水け葉の輝風かな

古今集より凡河内躬恒

年といわてとれ七夕のぬるよのひ

もて夜原無風

焚きむらりては七夕の年よ

續推遷集小枝大納言

けり世地なりとて天のわ

新拾遺集より

いづれを結ぬらたりや七夕の夜よ

乃後撰集より活釈王

すれはつねをわく 友乃たえ世契れり終りなれり
七夕乃竹杜牧

雲階月地一おと来抵經年引恨多最恨明朝
洗車雨不交回脚波天河

又 墨琳原

重帷斗波斗柄秋將曉鳥懷の移遷美使於衛
塩河渥一水還夜有寒時

又

織女牽牛雙扇開年一 友乃河来そ言天上

猶お見と彩勝人間去不回

○今日索餅とくふ事有り十節祀よむむう
氏乃ぬみ七月七日又祀すそ靈鬼邪となり今瘡
病とすむむうれぬ日はぬま麦餅とくふそふ
そ危日よありとく索餅とくふの靈とすつ後
人これ日索餅とくふの瘡病とくれえり

は流たりとくふあふとくふす且ま瘡の外風を
暑溼の威し内飲食色慾の傷れて病もの
月夜も夏傷に秋為瘡瘡とくふそふりあふ
瘡とくふそふりあふそふりあふそふりあふ

身受りて乃乃後め

天上銀燈如似物。万世蕭然皆新秋。従来事

多見哉。不獨人間乞巧橋

揚州七夕代詩

禁金牽牛言若何。須知織女并金梭。年々乞巧

人間巧不違人乃巧未多

○今日華元と合せ麴と化てうーと雪月今より

たり。日皮表と曝せの垣はと雪後七織に

又角蒿と取て毡襪書籍れ中よ玉の蠶と碑と

お塾事親よりなり

十二日二日より今日まで乃乃致うざり日毎に

煤塵と拂ひ雪と遠とちて塵埃とたふさぐ

へー九煤塵をたふさぐ一年に二ひーたふさ

ぐ冬煤塵とほろろと日下ぐ天を

よりさば事多かれ。津路あり。月より

より日やながく傳れとる。ひてより

○雪乃乃秋後とて。雪よりあふれやうへ

より酒味みとおろり又雪とならりあり

より雪よりうーやうきん今乃世倍よる

なり。死せる人を見さふとす。今より人

おもむくうれしきものありたり

○今世世俗人たに魂の事を教ふく火と燭し
つゆあき運る多有り愚ま愚ぬをせむるにす
士君子なる人を教ふ世ざらうや佛氏乃て
まゝいふ言ふと教祖志乃て邪靈来降すと
かゝるなり事とあは人多くていかに
まゝ傳へられし由難知も中元乃て邪靈と密に
しるし給ふ人冠服と云くつゆ出るといふ
揖讓し邪と争て入参平て又これを送てかき
乃て海と雲とにこれと云ふなり

かくはさしなうしきなりとて久しとて言ふ聖人乃
 送るわたりとせし禮義なり（西の志ある人いふに改
 するは、朱子の説く韓親の俗を去るに用
 聖月十日賜詔、改定禮義に用）なり又礼事と
 して俗よりさうとてなり先祖の靈を尊ぶは飲食と
 して墓よりして誂る墓前を焼籠といひ焼す
 先祖の靈を食とすなり身疎遠にして祖先は
 ないがうにすなり況んや今我々世俗よりして親
 戚の人の墓よりして誂る親戚の人いふはさうなり
 又久の親戚あり人をきくさうなりとて夢や方人
 たりしよりさうなりとてたのミ悲なるなり矣あり

凡そ家内をさうたてしなり一なる事多し中
 にも七月十九日孟秋の夜に佛經より事
 目蓮母と稱する事とありて其母は次なる老
 翁を誂るなりとありて家内中元は素饌と先祖
 より之竹とありて孟秋の形よりして紙張とあり
 又竹とありて竹のさしよりけし出とありてやきとあり
 佛の方湯とありて冬に室暖とありてこれと孟秋
 やし又夏を誂るも竹といふ所て之脚とあり
 又小織焼富とありて孟秋の事なり又米飯とあり
 て先祖とあり一秋に事なりとありとありとあり



十六日 國信より日男女の相違と事とす又やどまりて
奴婢のいふこといふあふりて母兄の相違する白
○今和を病むる赤壁に世に月と書きておわり
秋三月をどる月公堂の時なり八月十八日九月
十日夜を月と書する気配なりたゞ七月の書期
なり好事の人の事候ふ所とていふ今夜は
月と書記とて事なり

晦日 沐浴

は月夜冷なり衣と厚く着る風候に傷む事
なりなれ月夜に子も表氣うとて志す風なり

感いやりあ感冒傷寒 痰嗽喘急の病せむ
てこれと避へ

は月夜候と云く 柳漆と取
と去切よく 柳漆を水に合入
かきあせ水多かれハ
あふすきなり
あふりけと取ふとすい
又たあふりたる水といふ
陽に四日はあふり
薬を入る一凡柳漆を水に
それなり 薬を入る水に

よりて之中より乾蔓草とてくきけハ露食なり
 ちうハ八月の後さくハ一蘿蔔を中すくちハこれ
 ちやハ前がれた根のみ一七月初まハ一蘿蔔
 蘿蔔も蘿蔔と同財よりくハ一蘿蔔の根より
 宅かハ中をくハ一子く前てす一蘿蔔とハ月
 乃初まくも可なり大葱中葱等ともハ大葱ハ苗
 とわりちうハ葱中葱ハ根とハハ
 ハ月の末皮と收むハ法ハ橘と取ちうと去皮
 と收りハ乾す

四月蔓と食するハこれよりハ喝出のハ人ハと食す蔓と

食ハ目と採す麻様をくハハ氣とくハハ氣
 とくハハ氣とくハハ氣とくハハ氣とくハハ氣
 食ハハ氣とくハハ氣とくハハ氣とくハハ氣
 乳を食ハハ氣とくハハ氣とくハハ氣とくハハ氣
 と採すハ秋ハ後黄餅乃ハ水波餅と食ハハ氣
 五秋ハ後十日ハと多食ハハ氣
 六七月ハ後黄餅とくハハ氣とくハハ氣
 南ハ後黄餅とくハハ氣とくハハ氣
 月ハ後黄餅とくハハ氣とくハハ氣
 と多ハ後黄餅とくハハ氣とくハハ氣

まふ情く怒ふまふり

七月乃古候才一徳風玉才二白露降才三雲霞

太立秋の三候あり才に露乃金多才立玉地

姫蘭才六禾乃登太玉多才三候なり

立秋昼中才刻十分夜中才刻十分才中才立玉

昼中才刻十分夜中才刻十分才月令度義

八月

八月の節候は八月乃中。八月の暑候仲秋。八月の節候は八月乃中。八月の暑候仲秋。八月の節候は八月乃中。八月の暑候仲秋。

朔日倍々八朔と云今日たのそと人ふ物と違ひ

事ありある様はよとくこれるを更よお後なり

心禮ふをわす世俗の風儀なり或假名記よ建

年乃乃此よりい事ありたど先八田のそとふね

と折敷やとちやとふとく人乃と人此より

とるや又分明も大関れ又承の記よ此七年より

此より天下に流布せりとのち終りて建

此乃事なり人より或後よ法皇院の中よ

て加威通方には多にゆれり一時山田を

さるりといふとくを智乃男女多ふなりけり

ちりたてて運とりのち流し

の物語は後より多しとて其れを事一書久しき
 ところなりされども延喜式に史記ありて見
 え候すかく國史よもあやうされハふりて受
 けり然ハる事根源ハ後と作りと定一さ
 近世りて中なりゆりせのうき事物語とて書
 ふく色ハ偽書^{ごしょ}なる人々^{ひとら}筆力^{ひつりき}もと
 めりてなりぬる多し今い書ハ引用ハ考^{けん}
 へり又今いそふ書ハ秋乃西穀^{しゅうのせいこく}乃もの
 としふ出ぬ男めこれつわらとて作りて
 あつても八月朔^{がつしやく}腰となす信^{しん}ま乞^ぎと臆^{おく}蹠^{ちやく}とす

月令廣義潜確類書より凡そり勝ハ田穀ノ新
ケルと云々然れ名存せしむるハ初ノ秋義ト乞
フ勢也の事なり

○今日 楚社より 將軍家より賜り又 將軍家
より 以 越上 氏 被 仰り 事 事 なる こと 一

十日 明夜の陰晴をみるまじられし是より人の月と
考へし一陰明後八月十日に於てのみ

宣定貴明夜臨曉未可知

十五日 中秋と云ふ秋九十日也 （毛） 九月廿九日 國俗



張景忠の中條乃詩

万里秋空掛玉盤
樓香起處望西園
明月
身是別人自今宵
冷眼看

劉子競乃詩

夜半池邊月半明
悲此夜易天明
西園引取
秋江水添入
銅壺報曉更

杜子美乃詩

滿目飛明鏡
身折大刀鋒
蓬山地盡
攀桂仰天高
冰臨疑霜雪
林樛見羽毛
此時瞻白兔
直欲數秋毫

邵康節乃詩

一年一度中秋夜
十度中秋九度陰
未臨直須面
夜半
要明仍候到天心
安重照
照更情非淺
不睡
親時
多更深
洗老古人詩句好
何堪千里共如今

○今夜觀玉兔
與海內花
影以てそのり
多一と
月令度數
又見之
又いそぐ牡丹と
好一載
万事
今日
いそぐ
常々
宜う
飲る
代根と
淨く
洗一
去酒といそ
洗へ
九妙なり

二十七日 孔子乃生れ
臨の日なり
これ孔子の歿あり
はが死後納り

晦日 沐浴

えろろ
一社日
とく
三秋乃後
又の戌
戌日土乃

月夜後部神は越観より

は月夜後部神は越観より人々新穀と賞して征を八雲集より
るれら親戚と容るる

此月強風あり時人多く風を感して病者多し風を感
宅中より上句より新穀を賞して宅中より新穀を
とや様々ありとすは月よりとすは月よりとすは月より
萬草茂穰と上句の初前へ萬草茂穰と上句の初前へ
必何よりと生れし月には月には月には月には月には月には
はあり新穀ありとすは月には月には月には月には月には月には
必何よりと生れし月には月には月には月には月には月には

わつされいよりとすは月には月には月には月には月には月には
一けりありとすは月には月には月には月には月には月には
へ一けりありとすは月には月には月には月には月には月には

紅豆のひとと收麦一桃代をとすは月には月には月には月には月には
たおよりとすは月には月には月には月には月には月には
てとくへ一けりありとすは月には月には月には月には月には月には
取收麦一

穀一たふ集と脇へ後蓋して肉と割りととすは月には月には月には月には月には
とすは月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には
へ一凡そに穀宅よりとすは月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には月には

ころかむけり

八月廿二日 播磨 播磨の根多し八月採る

秋枝系松津洞波は下秋採宜晩事案案各

注其本契也 もと二三月の都も

八月廿三日 播磨 月令度敷の八月 有る播磨半と

ふくやまの煙ふく半とあはれハ永く不短す

播磨半の灰汁を洗ふより一減半より一々

減したるも虫をふく半後播磨半木刀等々

八月廿四日 播磨 播磨半と収まへ布と市一紅糸と用ハ絹布

と染事をとるその外用多

八月廿五日 播磨 冷なり多し生果と食へり次生蒜維播磨

生蜜糖子解と食ふより又萌芽と食ふより

赤糸無事月令 重及七歳より一減半法理乃

流泉と飲事かり人々一て療脚軟とむせむ

八月廿六日 播磨 八月廿七日 播磨 八月廿八日 播磨

八月廿九日 播磨 八月三十日 播磨 八月三十一日 播磨

八月三十二日 播磨 八月三十三日 播磨 八月三十四日 播磨

八月三十五日 播磨 八月三十六日 播磨 八月三十七日 播磨

八月三十八日 播磨 八月三十九日 播磨 八月四十日 播磨

八月四十一日 播磨 八月四十二日 播磨 八月四十三日 播磨

八月四十四日 播磨 八月四十五日 播磨 八月四十六日 播磨

八月四十七日 播磨 八月四十八日 播磨 八月四十九日 播磨

八月五十日 播磨 八月五十一日 播磨 八月五十二日 播磨

八月五十三日 播磨 八月五十四日 播磨 八月五十五日 播磨

死下此房これと云々これ命なりや
 たり世人九月は必ずしもむすむ酒との
 婦人茱萸囊と常々あはれなり
 雜記より九月茱萸と佩ひるなり菊氣ゆくのむすむ
 費長房桓景は災と避る神と教ふといふるれ本末と云ふれ
 西京雜記は賈佩蘭の女なり九月九日萸酒
 と食ひ菊氣ゆくのむすむれ人なりてあまなりむすむ
 下りけりてその由と云ふは後漢又月令廣義は仙書
 云ふと云ふなり桓景は始と云ふなり
 と引てその茱萸と辟邪氣と一菊氣と延壽
 客と云ふ九月は二物とかりて陽九は元と消
 ともあふん悪夢と云ふは後漢書と云ふにたす
 周書の周書は九月九日律書は九月九日數九か

るなり俗にけ日と云ふなり茱萸房とて取
 挿む氣通氣と辟除して初寒とあせぐと云ふ
 と云ふ是なり西漢の文又今日菊氣ゆくのむ
 長安の文にむすむ法菊を舒くけりて葉を
 花を朱朱にまぐと云ふと云ふ一朱年九月九日
 酒と取あはれこれと云ふと云ふと菊氣ゆくのむ
 西京雜記より云ふなり
 ○五言詩代中人身と云ふは上巳掃平七夕重陽ハ巾
 子孫も笑むなり此俗はありと云ふ月日と云ふ
 云々取あはれと云ふこれ古く人陽と云ふ

鳥飲慣留倚西窗 望眼愁

趙約月九日乃得

履齒臨翩印淡沙 云月落帽簷斜西風明月

催黃髮林公甘公在菊花

杜牧九日寄公書 的得小

江漸秋氣屬初涼 與客樓臺上望微人世冠蓋

爭口笑菊每頻插滿院歸但將杯打勝佳節

不用定心愁落暉 古詩今風只此世牛山何必

猶沾衣

○今日菊初代久黃江上味甘之取之菊園

菊也九月一取一純中九月一 月今廣義江上

十日國俗今日より是夜となく二月晦日一取之終る但

いり下り乞まふ終てふりす

十二日倭俗今宵月紙書はる事中秋此と一吉四

多ぬく終より八月十二日九月十三日ハ婁宮ありけ常

清明なる夜一月と取ふ良夜とすやんえりあれ

とてハ祝他れあやとあハ此止牛宮と深く考へり

又月日大小あやハちづるあは健とすのれとすハ秋

を月と美さる時あり中庭をりろくく月と書す

不佳とせり我國ハ又九月十三夜と用く月紙書

これの月乃よりまたなるも是を元と云ふなり

系忠通 号法性寺殿 九月十三夜既月待

用窓寂く月を照らす属窓秋を匡持ふ海を渡る
渡雪の初霜の家を経て踏み寄す十三夜既月勝れた教
百年宛る若くは傳ふ新國首は清明夢價千金

晦日 沐浴

い月部越して血脈と書ふ

上旬小暑より下旬に大暑と書ふ一麦を秋より
夏熟と云ふ所乃氣と云ふ所と月令廣義より
地肥饒なり云々云々云々云々の甚盛なり云々云々

十月以後十二月初まで云々

凡葉と云ふ九月以後取りたてに乾へ一十月以後
採ものハ陰乾してよりと書ふ一凡葉より書れハ
夏葉より葉ハ日に乾し冬葉より葉ハ陰干す
さより但葉種落葉萩芥ら云々とハ久しく烈日
小あせハ氣うきくたつたてんさより肉を収て
陰干す

い月牡丹芍薬及竹筴果木と云ふ一極てよりと月
令廣義より云へり農政全書より云へる果木と云
ゆる小暑九月乃中以後樹のまわりとありて縄と

いづまのうとあけりたる所へハ肥土を入水と焼

一 次年正月二月は梅雨つゆ下しもは四月の

い月桑と收とぎ入く一 月今度穀といく粟後一粟と

取水多れ肉入くうくものとき日ふり油と

炒く冷一穀入一入油一粟粟一粟焼くは油一壺

した一入入る多きいり竹葉と焼くは油と

と竹片ありろろどくたる和めくはと焼くは油と

いかる地は太れ壺とつむぎに煮たり酒煮はちん

つらるちりれ又塩水一二粒浸し取あは日下

胡麻と拌まぜ世よ入壺一とそ又時とき山中乃の登人の

候より生桑と二月目ふりも後能考く又目ふり

壺は收とぎはととら玉ハ出くはりて味あじありととり

又大桑と生ふく肝かんへ玉より粟乃芽生むる所

やうのとあて壺入る玉より粟乃芽生むる所

用土の巾一粟はちやぶふと一あけ壺の口

ふためさうき海はなりこの方と地は付壺へ芽

生せす久くくこゆりあり又煮土と煮入る

肉ようふと煮くもす

は比米穀と求もとめ貯へ一用多

水月量と食ふちられ痼疾こぢとなはる病とくへ新

傷^{あや}了^{あや}と換^かす藥^{くすり}と食^くふ次^{つぎ}種^{しゅ}と食^くふか多^{おほ}難^{がた}と
多^{おほ}く食^くふ次^{つぎ}大^{おほ}肉^{にく}とくく人^{ひと}の邪^{よこしま}氣^きと傷^やふ生^な冷^{ひや}の拍^{はく}
と節^{ふし}して痢^り疾^{ぢやく}と降^{くだ}る月^{つき}令^{しよ}度^ど義^ぎ其^{その}書^{しよ}

九月^{くわがつ}の古^{ふる}候^{こう}才^{すなは}一^{ひと}鴻^{こう}鷹^{たか}才^{すなは}二^{ふた}雀^{すずめ}入^い大^{おほ}氷^{こほり}乃^{すなは}蛤^{かき}才^{すなは}

三^{さん}菊^{きく}有^あ葉^は舞^ま乃^{すなは}三^{さん}候^{こう}なり才^{すなは}四^よ射^{しや}乃^{すなは}萩^{はぎ}才^{すなは}

才^{すなは}五^ご若^わ木^き葉^は落^お才^{すなは}六^む藝^ぎ出^で威^い儀^ぎ乃^{すなは}六^む葉^は落^お乃^{すなは}候^{こう}也^{なり}

冬^{ふゆ}氣^き至^{いた}四^よ才^{すなは}七^{しち}刻^{こく}乃^{すなは}五^ご才^{すなは}二^{ふた}刻^{こく}乃^{すなは}至^{いた}四^よ才^{すなは}

五^ご刻^{こく}乃^{すなは}十^{じゆ}分^{ぶん}乃^{すなは}五^ご才^{すなは}十^{じゆ}分^{ぶん}乃^{すなは}至^{いた}四^よ乃^{すなは}金^{きん}廣^{くわう}義^ぎ

日本^{にっぽん}集^{しゆ}解^{かい}記^き卷^{まき}之^の五^ご毫^ご

